

2016 年度決算説明会における主な質疑応答の要旨

<日 時>2017 年 4 月 27 日 15:30~17:00

Q. 株主還元の考え方は。

A. 安定した株主還元を継続したい。その中で資本効率を上げ、利益をだし、それに見合った形で、配当性向 30%以上という中期経営計画の目標達成をめざす。

Q. 北米の食料品製造・販売事業が、今年度に強く伸びた背景と今後の見通しは。

A. 今年度は景気が好調で、スーパーにおけるシェアがあがってきている。また、加工・業務用でしょうゆを使う味付けが増えている。今後も引き続き今までと同じ施策を継続し、中期経営計画の目標を達成したい。

Q. 欧州の今後の見通しは。

A. 中期経営計画では、欧州の食料品製造・販売事業の売上で 2 桁成長をめざしており、概ね順調に推移している。食料品卸売事業も順調であり、欧州全体では現地通貨ベースで 2 桁成長をしている。今後も高い成長をめざしていく。

Q. アジア・オセアニア地域のしょうゆの売上が伸びる予想の背景は。

A. 2016 年度の第 4 四半期から中国の製造会社を連結した。また、ASEAN でインドネシアのハラル商品の製造体制ができたので、この部分の成長を見込んでいる。

Q. 豆乳飲料について、現状のポジションをどう考えているか。

A. 2016 年の豆乳市場は 31 万 4 千 KL と過去最高を更新した。アーモンド飲料関連、甘酒等の複合競争が出てきている。一時的に豆乳のフェイスが縮小していたが、現在は戻しており、今期は売上をしっかりと作っていききたい。

Q. 国内の広告宣伝について、どの分野の広告を増やしているのか。また、それに見合ったリターンはあるのか。

A. お客様のトライアルを上げる目的と、高付加価値商品の価値をお伝えする目的で、広告宣伝を行う。テレビ広告を契機に小売店での導入率が上がり、さらにこれを買っていただくお客様が増えるという意味で、リターンはあると考えている。

- Q. 「のれんの償却額」が計上された背景は。
- A. キッコーマン株式会社が保有しているキッコーマン飲料株式会社の株式の評価にあたり、金融商品に関する会計基準に則って保守的に処理した。豆乳事業の買収後に製造会社と販売会社に分離したが、販売会社であるキッコーマン飲料は資産規模が小さく、株式の取得価額に対する時価純資産の割合が低い。買収後一定期間を経過したこともあり、キッコーマン株式会社個別で株式評価減を計上するとともに、連結では販売会社分ののれんを一括して償却した。
- Q. 設備投資が今年の計画で増えている理由は。
- A. 国内では「いつでも新鮮」シリーズ、豆乳の売上増に対応する設備投資、海外ではしょうゆ売上増に対応する設備投資と食料品卸売事業のネットワーク強化のための倉庫等への投資を計画している。
- Q. 貸借対照表について、総資産の圧縮が進んでいるという印象だが、この傾向がしばらく続く見方でよいのか。また、M&Aを行う重要性はどの程度あると考えているか。
- A. 資産規模は圧縮を図っている。今後も在庫など圧縮できるものはしていきたい。DEレシオは0.5倍という方針を掲げている。2,000億円を超える自己資本があるので、1,000億円程度の有利子負債は考えられ、M&Aについても良い案件があれば実施する。
- Q. 次期中期経営計画での国内の収益性改善策についての考えは。
- A. 体質改善は引き続き進めるが、その効果は今の中期経営計画ほど大きくはならないだろう。効果が下がっていくような改善でなければ、体質改善が進んでいない、ということになってしまう。
- 成長による収益改善については商品政策が最重要ポイント。より効率的にスピーディーに、より価値の高い商品を具現化する方法を検討している。

以 上